

## 子どもの音遊びから表現を導く試み

—楽器やモノを用いた活動実践をもとに—

白石 朝子・小栗 美砂\*・内田 由美子\*・近藤 悦子\*  
堀 夏紀\*・水野 妃佐子\*・村松 麻衣

### A Study to Bring out the Spontaneous Expression of Children from Sound Play Activity : Based on Activities with Musical instruments and Goods

Asako SHIRAISHI, Misa OGURI, Yumiko UCHIDA, Etsuko KONDO,  
Natsuki HORI, Hisako MIZUNO and Mai MURAMATSU

#### 1. はじめに

本研究は、保育者養成校で音楽表現に関する授業を担当している教員による研究グループが、幼児を対象とした音遊びと表現遊びの実践を行い、子どもの活動の観察を通して子どもの主体的表現を引き出すための環境構成と指導法について検討するものである。平成30年に施行された新しい幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領でも乳幼児期から子どもの姿を見通し、3つの柱である「資質・能力」<sup>1)</sup>を育てる必要性が改めて示されたように、保育者養成校では、子どもの心身の発達や子どもを取り巻く環境を理解したうえで、子どもの遊びを豊かに展開するために必要な知識や技術を実践的に習得できるよう指導を行う必要がある。特に保育内容「表現」の領域では、子どもの表現は、ある特定の表現活動によるものではなく、日々の遊びや生活の中にあると捉えることが大切な視点となろう。そこでは、保育者が子どもの気持ちから生まれる主体的表現に気づく力を養うことが重要であるといえる。

以上のことを念頭に、本研究では全2回の実践をもとに分析、考察を試みた。第1回の実践は、オノマトペ<sup>2)</sup>や身体表現、視覚的な効果も取り入れ、総合的な表現活動を目指した。分析の結果、子どもの表現が指導者（保育者）の枠組みから外れたところにあらわれ、子どもの視点による表現に寄り添うことが、更なる子どもの主体的表現を引き出すことを示した。(白石、小栗ほか：2018)

本論は、第2回実践（楽器やモノを用いた音遊び）の分析を踏まえて、音遊びから子どもの主体的表現へと導く指導法について検討する。分析では、特に楽器やモノとの関わりがどのような役割を果たし、子どもが感じたことや考えたことをどのように表現するのかに着目した。本論を通して、音に対する子どものありのままの姿を捉えて子どもの表現を導くためには、保育者にどのような援助が求められるのかを考察したい。

---

\* 非常勤講師

## 2. 実践方法

研究実践では、前回と同様に導入（音遊び①、②）と実践（表現遊び）による構成で、以下のように行った。

- ・対象：5歳児 計5名（女児A・B・C、男児A・B）
- ・研究実践者：研究者 計5名（進行役1名、ピアノ奏者1名、その他3名）
- ・日時：平成29年8月3日 16時～17時（実践は約35分）
- ・場所：土岐市泉西公民館 研修室<sup>5)</sup>

### （1）前回の実践との相違点：楽器やモノを用いた表現への試み

今回の実践が前回と大きく異なる点は、楽器や音の出るモノをつかって表現遊びに取り組んだことである。前回は、動物が歩く音や水に入る音のオノマトペ表現を試みたが、水遊びをしたときの気持ちの音が子どもから表されなかった。そこで、研究グループでは楽器やモノを用いたら、子どもの主体的表現に結び付くのではないかと考え、様々な音の出る楽器やモノを準備することにした。

当日は、表1のように24種類の楽器やモノが用意された(図1)。楽器は音程のあるもの(ウィンドチャイム、ウクレレ等)とないもの(マラカス、レインスティック等)を混在させ、また、扱い方によって音に変化が出るもの(ハーモニックパイプ、フレクサトーン等)を意識的に取り入れた。一方で、モノは楽器やほかのモノとの組み合わせで音を出す素材や道具として扱えるようなもの(泡だて器、ナイロン袋等)と素材を容器に入れたもの(小豆とザル、クリスタルストーンとグラス等)を準備した。これらを選んだ理由は、音の出し方が決まっておらず、子どもが自ら音を探すことを期待したためである。



図1 用意した楽器やモノ

表1 用意した楽器やモノ

楽器	ウィンドチャイム、ウクレレ、カホン、ギター、コンサーティーノ、ハーモニックパイプ、フレクサトーン、マラカス、カリンバ、レインスティック
モノ	泡だて器、お菓子缶、ナイロン袋、箸、火箸風鈴、バナナ付き缶、ミニハリセン
モノ(素材を容器に入れたもの)	小豆とザル、クリスタルストーンとグラス、栗と缶、2センチ角の厚紙とペットボトル、水とペットボトル、小さなサイコロとカプセル、氷と水筒

### （2）実践への導入：音遊び①

この導入は、子どもが耳を澄まして音から想像を膨らませることをねらいとし、様々な音に興味をもつことを目的に行われた。方法として、カラーパネルの裏で音源が何であるかを子どもに見えないようにして3種類の音（ウィンドチャイム、小豆を入れたザル、ハーモニックパイプ）を聴いてもらった。その後、進行役が子どもにどんな音が聞こえてきたかを尋ねた。その際には子どもに音源が何かを尋ねるのではなく、音から生まれる想像を大切にし、音への注意を促す程度の声掛けにとどめることを心がけた。子どもからは様々な発言がみられ、子どもの発言を一通り待ったら音源を見せて種明かしをした。子どもは、実際に3つの音源に触れて

音を鳴らしたが、特にハーモニックパイプは初めて見た楽器だったため、子ども全員が特に関心を持ち順番に鳴らして音を聞いていた。

### (3) 実践への導入：音遊び②

次に、オノマトペを音で表す遊びを行った。この導入は、前回の表現遊び《たのしいみずあそび》で実践したオノマトペ表現と今回の楽器やモノによる表現とのつながりを子どもが感じることが期待し、オノマトペと実際の音を結び付けることを目的に行われた。

方法は、まずピアノの周りに子どもを集め、《とんでったバナナ》(片岡輝作詞／桜井順作曲)の1、5番(表2)を研究実践者が歌った。《とんでったバナナ》には、表2のように歌詞に特色のあるオノマトペが多く含まれている。進行役が「今から歌を歌うよ。面白い言葉が出てくるから、どんな音があったか教えてね」と声掛けをし、研究者が「ツルン」や「ボンボコ」のオノマトペを特に強調して歌った。

その後、模造紙に書いた歌詞を見せて子どもと一緒に歌い、進行役の提案で「ツルン」と「ボンボコ」の音探しを行った。子どもは24種類の楽器やモノを自由に触りながら自分の納得する楽器、モノを選んで歌に合わせて音を鳴らして楽しんだ。

表2 《とんでったバナナ》歌詞

番号	内容
第1番	バナナがいつぽんありました あおいみなみのそらのした ふたりのこどもがとりやつこ バナナはツルンととんでった バナナはどこへいったかな バナナンバナナンバナナ
第5番	ワニとバナナがおどります ボンボコツルンボンツルン あんまりちょうしにのりすぎて バナナはツルンととんでった バナナはどこへいったかな バナナンバナナンバナナ

### (4) 実践：表現遊び《たのしいみずあそび》

《たのしいみずあそび》は、研究者が作成した話にもとづき作詞作曲した歌である。3匹の動物(ウサギ・ハリネズミ・ライオン)が登場し、日差しが降り注ぐ暑い日に公園に集まって水遊びを楽しむ<sup>3)</sup>。歌詞は、表3の通りである。

《たのしいみずあそび》のカラーパネルやペープサートは前回と同様に用いた<sup>4)</sup>が、ペープサートは動物のみを使用した。水しぶきやお面を使用しなかった理由は、見えるモノを少なくすることがかえって子どもの想像力を働かせると考えたためである。また、前回の実践からアートバルーンのプールも子どもの集中力を損なうデメリットがあると判断し、今回は床にビニールテープを描くことでプールに見立てた。また実践には、付属のアップライトピアノ1台も使用した。

実践では、まず前回最も子どもに親しまれたウサギをカラーパネルから出して登場させ、進

表3 《たのしいみずあそび》歌詞

番号	内容
第1番	あついあついひになりました きょうはみんなであそぼうよ だれがいるかなだれだろう (歩く音の表現) たのしいみずあそび イエイ
第2番	あついあついひになりました きょうはプールでみずあそび さあさはいろうプールのなかへ (水に入る音の表現) たのしいみずあそび イエイ
第3番	あついあついひになりました きょうはたくさんあそんだよ どんなきもちになったかな (気持ちの音の表現) たのしいみずあそび イエイ

行役の声掛けによって、表現遊びの体験を思い出すよう促した。続いて子どもと研究実践者が一緒に《たのしみずあそび》の第1番を歌った。子どもは研究実践者の歌に合わせ、自然に歌いだした。そして、ウサギの歩く音、水に入る音、水遊びをした気持ちの音について楽器を用いて表現するように促した。これらの様子を部屋に置いた2台のビデオとカメラで記録し、研究者が子どもの様子を詳細に分析した。また、終了後には前回と同様に保護者の方へアンケートを行うことで、より客観的な分析を目指した。

### 3. 事例と考察Ⅰ：子どもによる音の聴取の特徴

本実践では2つの音遊びを通して子どもが音に反応し、音から想像して言葉や動作で表す様子が観察できた。ここでは、その事例を挙げながら子どもの姿を分析し、子どもの音の聴取の特徴を考察する。

#### （1）音による想像性：音遊び①の実践から

事例1：カラーパネルの裏からウィンドチャイムの音が聞こえると、女児Aが「かざりの音。おうちの上にあるキラキラしたやつ」、男児Bが「おほしさまがかがやいている」と言った。また、小豆を入れたザルの音では、男児Bが「おこめの音だ」と発言し、ハーモニックパイプの音では男児Aが「まつりの音」と言い、男児Bが「まさか、ゆうれいの音？」と少し怯えながら発言した。

【考察】子どもは、最初にカラーパネルの裏で鳴った音を聞いて、「かざり」「おこめ」「まつり」という生活で耳にした音を想像したと考えられる。ウィンドチャイムは玄関もしくはドアを開けた時に聞いた音の記憶、小豆とザルは台所から聞こえた米を研ぐ音の記憶、ハーモニックパイプは祭りに出かけた時に耳にした音の記憶を呼び起こしたのだろう。このように、子どもは生活で耳にした音の記憶を頼りに、まずは自分の経験を想像したと推測できる。特に子どもにとって親しみのなかった「小豆」を、「おこめ」と捉えて発言したところに、日々の生活からの想像が見出せるといえる。（図2）



図2 小豆を触る子どもたち

次に、ウィンドチャイムは「おほしさま」や「かがやいてる」というように、実際には音がないものを想像する発言がみられた。また、ハーモニックパイプでは、男児Bが「幽霊？」と小さな声で発し怯える素振りを見せた。これらの様子から、子どもは数分のうちに想像の世界に入り、音が子どもの想像を豊かにしたといえるだろう。

#### （2）歌詞（言葉）による想像性：音遊び②の実践から

事例2：進行役が《とんでったバナナ》を歌う前に、子どもに「面白い言葉が出てくるよ、よく聞いてあとで教えてね」と声掛けをした。そしてピアノ伴奏で歌った後、再度「何か聞

こえた？」と問いかけた。その問いに対し女児Bが「バナナ！」男児Bが「バナナ！」、男児Aが「わに」と答えた。また、男児Aが「バナナがどっかにいったこと。バンってロケットになってうちゅうまでとんでいったんじゃない？」と話した。その後、子どもと実践者が一緒に歌詞を見ながら《とんでったバナナ》を歌った。そして同じ問いかけをしたところ、男児Aが「あった、ツルン」と答え、男児Bが「ボンボコツルリン」と答えた。

【考察】子どもは、まず面白い言葉として「バナナ」や「わに」と答えた。研究実践者は、「ボンボコツルリン」などのオノマトベに子どもがすぐ反応を示すと考えていたため、これは、その予想に反する答えであった。そして、男児Aの「ロケットになってうちゅうまでとんでいった」という答えから、子どもが歌詞からイメージした世界を想像したことがうかがい知れる。最初に「バナナ」と答えたのは、「バナナ」が普段の生活で馴染みのある言葉であるため、もしくは歌の中の主人公になりきったためかもしれない。このことから子どもは、歌を歌うとき、言葉の音の楽しさよりもまずは言葉の意味を捉え、歌の世界を想像したといえるだろう。2回目に《とんでったバナナ》を歌った際には、「ツルン」や「ボンボコツルリン」等のオノマトベを挙げたが、これらは歌詞を書いた模造紙をみて歌った研究実践者による導きが大きく影響していると推測できる。

以上のことから、子どもが音遊びをする際に歌を用いる場合は、まずは歌の内容を知り、その世界を想像することが大変重要であるといえる。歌の内容への理解という前提があって初めて音遊びが子どもの豊かな想像性につながる活動になるのではないだろうか。

#### 4. 事例と考察Ⅱ：子どもと楽器やモノとの関わり

これまで述べてきたとおり、本実践では楽器やモノでの表現を試みた。ここでは、子どもが楽器やモノに触れる時どのように音を探し生み出すのかについて、事例を挙げて考察する。

##### (1) 音の探索（楽器）：音遊び①の実践から

事例3：進行役がカラーパネルの裏で鳴らした3つの音源を明かした。まずウィンドチャイムを子どもに見せると男児Bが手を伸ばし触って鳴らした。次に小豆とザルを見せると子どもが全員手をザルに入れ、かき回して音を出した。最後にハーモニックパイプを見せると女児Bが「ばね？」、男児Bが「ばねにみえん」と言い、女児Aが受け取ってまわそうとした。試しても音が出ないため、子どもが次々に「かしてかして」と声を上げた。

【考察】進行役が3種類の音源を見せた中で、子どもが最も興味を示したのはハーモニックパイプであった。子どもの「ばね」という言葉からも察するように、音の出る楽器には到底見えない、ホースのようなものからどうやったら音を出せるのか、子どもは不思議に感じたためであろう。子どもは「かしてかして」と次々に手を伸ばし、懸命に回してみるが音を出せなかった。そこで、研究実践者が音を



図3 ハーモニックパイプを試す子ども



出して見せると、「やってみたい」と口々に言いはじめた。子どもは、他の子どもが音を出す様子を注意深く見ながら、どのように回すとよく音が鳴るのか、高い音や低い音がどのように出るのかを観察している様子であった。子どもが楽器を見たときに抱いた好奇心は、そのまま音の出し方への工夫や活動への意欲につながるといえるだろう。

## （２）音の表現方法（楽器）：音遊び②の実践から

事例４：進行役が「じゃあ、さっきみんなツルンが面白いって言ったから、ツルンの音を探してみよう」と子どもに声掛けした。男児Ｂは、机の上のモノや楽器の中からギターを選んだ。最初、コントラバスを弾くように楽器を左手で持ち、右手で指板をぺたぺたと触ったり、叩いたりしていた。その後、ウクレレの弦を鳴らす研究実践者の姿を見て、楽器を右手に持ち替えると左手で低弦から高弦へと滑らせはじめ、しばらくこの動作を続けた。

【考察】音遊び②では、『とんでったバナナ』の歌詞の中にある２つのオノマトペ、「ツルン」と「ボンボコ」を楽器やモノで表現することを試みた。その中で男児Ｂは、ギターを手に取り様々な方法で音を出して音の表情を確かめている様子が見られた。男児Ｂはギターを今回初めて触ったが<sup>5)</sup>、ギターの弦をはじくだけでなく、指板を触ったり叩いたり打楽器のように音を出すなどして、想像した音表現を試行錯誤する姿がみられた。このことから、子どもは自ら様々な方法で楽器と関わり音の出し方を探ることで、楽器の本来の奏法に囚われない自由な発想で音を楽しむことができたといえる。

また男児Ｂは、その後にウクレレの弦を鳴らす研究実践者の姿を見て、ギターの弦に指を滑らせて音を出すことを試み、「ツルン」の表現を何度も試していた。おそらく、研究実践者から大きなヒントを得てこの動作を繰り返したのだろう。このことから、子どもが自分の経験や感覚からは見出せない音表現を、指導者に誘導されることで新たな発見として取り入れようとしていたことが推察できる。指導者の役割の重要性が見出せるだろう。

## ５．事例と考察Ⅲ：表現の導き方の違いと指導法の提案

表現遊び『たのしいみずあそび』の実践では、表現を導くための道具として楽器やモノを用いた。ここでは、「オノマトペ（言葉）による表現」<sup>6)</sup>と比較をしながら、２つの表現の導き方の比較をもとに、その違いを分析する。また、表現活動の過程でみられた子どもの気持ちについても言及し、子どもの主体的な表現を導く指導法について考察する。

### （１）表現の多様性

全２回の実践では、共通してうさぎの歩く音、水に入る音、水遊びを楽しむ音の表現に取り組んだ。子どもの表現をまとめたものが表４である。

楽器やモノによる表現では、子どもがそれぞれ異なるものを迷いながら選択する姿がみられ、オノマトペで一致したものよりも多様な表現が行なわれたといえる。オノマトペは、例えばウサギの歩く音が「ピョンピョン」で全員一致したように、子どもがこれまで耳にしてきたものやそれまでに得た知識を用いて決定する姿がみられた。また、「ジャブン」を変化させるなど

単純であり、ひとつの道筋がみえていたといえる。その一方で、楽器やモノは、一人一人の感覚から生まれるものであり、決まったものや共通のものがなかった。(図4)音の中には、その場で偶然生まれる音や作り出す音も含まれ、表現が多様化したと捉えることができるのではないだろうか。

しかし、音表現では様々な表現がでる一方で、音の選択に多くの時間がかかった。今回の実践でも、用意していた3つの動物の表現が、子どもの集中力と時間の都合上1つ(ウサギ)の表現実践のみとなってしまった。実践では、子どもの好奇心から、ひとつの音や楽器に集中しすぎたり、その反対に、表現が出るまで時間がかかりすぎて場面が進まなかったりすることがあった。このことから、指導する側の全体を見通す力が必要であるといえるだろう。

また一方で、表5のように子どもが全体の発表場面で表した音は、その子どもが見つけ出した一つの表現の結果ではあるが、子どもの気持ちがどのように表現されたのかを理解するためには、そこに至った経過的な音表現も読み取る必要があるだろう。



図4 水に入る音 発表の一場面

表4 2つの実践における表現の違い

音表現	第1回目:オノマトペ(言葉)による表現	第2回目:楽器やモノによる表現
歩く音	全員:ピョンピョン	男児A:スズ 男児B:小豆の入ったザル 女児A:カリンバ 女児B:フレクサトーン 女児C:コンサーティーナ
水に入る音	女児C:ジャポーン 男児B:ジャブン 男児A:ジャバーン	男児A:ギター 男児B:ガチャガチャのカプセル 女児A:ウクレレ 女児B:小豆の入ったザル 女児C:色々触るが決まらない
水遊びをした気持ちを表す音	表現はでなかった	男児A:ギター 男児B:バネの付いた缶 女児A:カリンバや栗の缶を鳴らすが決まらない 女児B:ガチャガチャのカプセル 女児C:小豆の入ったザル

## (2) 表現の試行錯誤

第1回の実践(オノマトペ)では表現が出てこなかった「気持ちを表す音」では、子どもが様々な楽器やモノを試しながら音を探す姿が見られた(図5)。しかし、表4(前掲)のように選択した楽器やモノを示すだけでは、実際に表した音がどんな気持ちを表現したのか把握できていないといえる。そこで、結果的に音が決まらなかった女児Aと、バネのついた缶を選択した男児Bを例に、子どもが試行錯誤する様子を経過的に検討してみると、表5ようになった。

表5から、女児Aは、5つのモノや楽器を触りながら「気持ちの音」を考えようとしたことが分かる。結果的にはどれも選ばなかったが、首をかしげて探す様子は見られ、楽器を控え目にさわり、注視していた。女児Aは、「気持ち」という捉えどころのない問いかけに、戸惑ったのかもしれない。一方で男児Bは、つぶやきながら音を探したり、楽器を積極的に何度も鳴

表5 子どもが気持ちを表す音を探す様子

子ども	選んだ楽器やモノ	様子
女児A	① 小豆の入ったザル	女児Cと一緒に触る
	② 氷の入ったコップ	コップの中の氷を触る。
	③ コンサーティーナ	軽く押して鳴らす。
	④ ウクレレ	両手の指ではじいた後、首をかしげ移動する。
	⑤ 栗の入った缶	缶の蓋を開けて見る。
男児B	① コンサーティーナ	数回鳴らすと「これかな…ぜんぜんだめ」とつぶやく。
	② はりせん	足ももの部分に打ち付け、「これもちがう」とつぶやく。
	③ 栗の入った缶	強く上下に振って鳴らす。
	④ バネの付いた缶	ゆっくりバネを引っ張り、何度も鳴らす。



図5 音を探す子どもたち

らしたりする姿から、「気持ちがいい」という思いを、音にしようと色々試す様子がみられる。男児Bも結果的に音を選択できたとは言い切れない様子ではあるが、想像の音と実際の音が近いかどうかを、楽しそうに探す姿がみられたといえる。

これらの子どもの姿から、子どもたちが楽しさを感じていることは察したが、表現として捉えた時に指導法として今後模索する必要があることを痛感した。その一方で、子どもの表現は、選んだ音の結果ではなく、音を探す過程に多く表れていると考えられるだろう。

### （3）表現活動にあらわれる子どもの気持ち

気持ちの音が決まらなかった女児Aと同様に、水に入る音が決まらなかった女児Cは、『とんでったバナナ』の音遊びで以下の事例がみられた。

事例5：女児Cは、『とんでったバナナ』の歌を楽しそうにうたい音遊びに取り組んでいたが、「ツルン」の音を発表する場面で見つけた音を持って参加することができなかった。他の子どもたちが音の表現をしている間、音楽の流れやタイミングに関係なく自分が興味を持ったモノの音を鳴らしていた。

【考察】進行役の観察では、女児Cは、色々な楽器やモノを鳴らし迷いながら探し続けていたため、「ツルン」や「ボンボコ」の音が「見つからない」というひとつの表現をしたと捉えた。しかし、実践後の女児Cのアンケートには、「自分が見つけた音を鳴らす楽器（ウクレレ）を男児Aが先に取りてしまい、他の楽器を探したけれど見つからなかった。ひとりずつ順番に選び、好きな楽器を取りたかった。そうすれば自分の音が鳴らせたのに。」という回答があった。このことから、女児Cは音を見つけていたが、表現する場面でその楽器が使えなかったという思いをもっていたことが明らかになった。

そこで研究者によるビデオ分析を行った結果、以下の様子が確認できた。

事例6：研究実践者のひとりが「ツルン」の音をウクレレで試していると、その姿を見た女児Cが駆け寄り、研究実践者が鳴らしていたように真似をしながら音を出した。しかし、少しするとウクレレを置いて他の音を試した。その間に、男児Aがウクレレを鳴らし出し、その後も持ち続けた。女児Cは、男児Aに駆け寄り無言でウクレレに手を差し出すがさっと手を引き、次はギターを持っていた男児Bの所へ行くが、話しかけることもなくあきらめた様子で他の音を探し始めた。その後、進行役が「ボンボコ」の音を探すように場面転換を行ったため、男児A、男児Bのウクレレやギターは、いったん机に置かれたが、次に行った音の



発表で、すぐに男児A、男児Bがそれらを手にしたため、女児Cがウクレレやギターを手にすることができなかった。

【考察】女児Cは、ウクレレで鳴らした弦の音に対して強く思い入れがあり、感覚的に弦楽器の音でなら「ツルン」の音が出せると捉えていたことが事例6から見受けられる。女児Cは、この時すでに「ツルン」の音表現を明確に決めていたのであろう。一方で男児A、男児Bにおいても、ウクレレやギターを鳴らし続け、いったん机に置いた後も手にしたことから、研究実践者のひとりが鳴らしていた音に強く共鳴し、すぐに表現する音を決めていたと推測できる。

分析から、女児Cは研究実践者の誘導する音と自ら探す音を比べながら「ツルン」の音を真剣に考え、自分の音表現をしたかったと推測できる。このことから、進行役は目の前にいた子どもの音表現は観察できたが経過的観察と子どもの思いをくみ取った対応ができなかったといえよう。一人一人の子どもの音表現を読み取るために、研究実践者がひとりの子どもへ経過的に援助をし、進行役と共有する工夫ができていたならば、進行役の子どもへの言葉掛けは気持ちに寄り添うものとなったはずであろう。それにより女児Cは、使いたい楽器が鳴らせない思いを話することができていたかもしれない。そして、進行役は研究実践者全員と相談しながら指導法を変更し、音の発表方法について臨機応変に対応する試みもできたであろう。

保育の場面においても、細かな子どもの観察とその内容把握が、子どもに寄り添う指導法を考えるうえで大変重要である。音の表現を引き出す際には、子どもの気持ちを音表現へ生かすためにどのような援助が適当かを熟考する必要がある。また、今回の子どもの思いは、保護者へのアンケートとビデオ分析により把握することができた。これは、実践がその場で終わらず、子どもの気持ちを保護者と連携して捉える子育て支援の視点や、生活や遊びの記録分析の大切さにもつながるといえよう。

## 6. まとめ

本論を通して、楽器やモノを用いた子どもの音表現の実践について考察した。前論文（第1回実践）では、子どもの表現には子どもが培った経験や体験が大きく関わることを述べたが、本実践では、楽器やモノを試行錯誤して扱い、偶然に作り出された音の面白さを感じる子どもの姿が観察できた。例えば男児Bは、事例と考察Ⅱで述べたように、ギターを叩いたりこすったりと様々な方法で音を鳴らし、水遊びの音表現では、モノ（ガチャガチャのカプセル）を自分の胸の位置から落としたり、様々な方向から転がしたりして、色々な音を生み出していた。

オノマトペ表現には子どもの迷いが少なく、子どもそれぞれの感性より、経験や語彙力に影響されていると考える一方で、楽器やモノによる音については、事例と考察Ⅰで述べたように音の聴取には影響があるが、音の表現活動では、経験にとらわれない自由な感性や発想によって様々な音を生み出すことができるのかもしれない。その点で、今回の導入である《とんでったバナナ》はオノマトペを導く音遊びとなってしまう、言葉では表せない感情を音で引き出す目的が、結果的にオノマトペを音にするという導きになってしまったとも捉えられる。

また、事例と考察Ⅱで述べたように、楽器やモノによって生み出された音が、偶然でなく子どもの表現として必然になるためには、子どもがそれらと主体的に関わる時間の確保も必要であり、指導者の大きな役割が求められる。保育現場でも、楽器と関わる際に子どもが主体的に

音を楽しむ時間を大切に、保育者が子どもの思いに寄り添いながら一緒になって音を探すことが大切であるといえるだろう。

指導者の果たす役割が大変重要であることは言うまでもなく、特に事例と考察Ⅲで述べたように、子どもの思いをいかに把握するかが実践の大きな鍵となる。子どもの思いに寄り添うためには、経過的な観察とその場に応じた援助を熟考する必要があるといえるだろう。さらに子どもの意欲や好奇心が活動に大きな影響を与え、それらを高められるのは指導者、つまり保育者である。特に楽器やモノを扱う表現活動では、子どもと指導者（保育者）の間に対象物（楽器やモノ）が入ることで、子どもが体ではなく対象物に向かっていているときの様子を深く観察し、子どもの探索を見守るべきか、子どもの活動に介入すべきかを判断する力が求められるといえるだろう。

表現活動の主役は、音や選択された楽器とモノではなく、あくまで子どもであることを忘れてはいけない。子どもがどのような表情で、どのようにつぶやきながら、どのように体を動かして表現しているのかを観察することが、子どもの気持ちを理解して表現を導く重要な鍵になる。このことは、音遊びから表現を導く際に、音楽表現を追い求めるのではなく、子どもの表現を導くという本来の視点からそれないことを常に意識することを意味しているといえるだろう。

## 謝 辞

本研究にあたり、表現遊びの実践にご協力くださった子どもと保護者の皆様に、心よりお礼申し上げます。

## 脚注

- 1) 「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」
- 2) 音の音声の強弱や周波数、いわゆるシラブルで伝達される欧米の言語と異なり、日本語は、あ～んの50音で判断され、この「あいうえお」に似た音が自然界の中に沢山存在する（角田：2016）。子どものうちに母音と子音によるオノマトペを豊かに表現することは、その後の創造性の発展につながり、子どもの成長に、とても重要であると考えた。
- 3) 作成した譜面などについては、第1回実践内容（白石、小栗ほか：2018）を参照。
- 4) カラーパネルなど詳細については、第1回実践内容（白石、小栗ほか：2018）を参照。
- 5) 実践後の保護者によるアンケートで確認した。
- 6) 第1回の実践内容（白石、小栗ほか：2018）による。

## 主要参考文献

文部科学省2018『幼稚園教育要領解説』東京：フレーベル館。  
厚生労働省2018『保育所保育指針解説』東京：フレーベル館。  
内閣府・文部科学省・厚生労働省2018『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』東京：フレーベル館  
石井玲子編著 2009『実践しながら学ぶ子どもの音楽表現』大阪：保育出版社。  
岡林典子、佐野仁美ほか 2018「領域『表現』と小学校音楽科をつなぐ音遊びの可能性：『マラカス作り』によ

- るオノマトペ表現と協同性の成り立ちに注目して』『京都女子大学発達教育学部紀要』第14号：115-124。
- 白石朝子 2017「領域『表現』における幼児の音楽表現を豊かにする指導法の検討—研究コンサート（全3回）の実践から—」『名古屋女子大学紀要』第63号：322-333。
- 白石朝子、小栗美砂ほか 2018「子どもの主体的表現を導くための環境構成と指導法の考案—表現遊び《たのしいみずあそび》の実践をもとに—」『名古屋女子大学紀要』第64号：199-211。
- 角田忠信 2016『日本語人の脳』東京：言叢社。
- 無藤隆 2018『10の姿プラス5・実践解説書』東京：ひかりのくに。

